

教科書に載る小説、載らない小説：芥川龍之介「羅生門」と山田詠美「ぼくは勉強ができない」

花田, 俊典
九州大学大学院比較社会文化研究院教授

<https://doi.org/10.15017/8467>

出版情報：九大日文. 4, pp.204-217, 2004-04-30. 九州大学日本語文学会「九大日文」編集委員会
バージョン：
権利関係：

教科書に載る小説、

載らない小説

——芥川龍之介「羅生門」と

山田詠美「ほくは勉強ができない」——

HANADA
花田 俊典

問題領域

「教科書に載る小説、載らない小説」というタイトルを掲げています。具体的に、どんな小説が「載る小説」であり、あるいは「載らない小説」なのかは、すこしあいまいです。「載る小説」は、過去に国語教科書に採録された小説、および現在刊行中の教科書に採録されている小説（＝「載った小説」）をさしませんが、さらには今後「載るかもしれない小説」も含まれる。一方、「載らない小説」というのは、じつさいに文部科学省（旧文部省）の「検定」をパスしなかったり、あるいは検定はパスするかもしれないけれども教科書採択権をもつ各自自治体の教育委員会や教育現場の教員に受け容れてはもらえない、あるいは社会的に響（ひびく）をかうであろうという理由——じつにさまざまな理由——で教科書に採録することがためらわれたり、あるいはためらわれるであろう小説群です。

日本では現在、小学校・中学校・高等学校を通じて文部科学省（旧・文部省）による「検定」に合格したいわゆる「検定教科書」を使用することが義務づけられています。いま、高等学校の「国語」という科目にかぎっていえば全国（大半は東京）に十社ほどの教科書会社があつて、各社が「学習指導要領」に即してそれぞれ独自に工夫した教科書を出版しています。そして全国の小中高の各学校はこれら十種類ほどの検定合格済教科書の内容を比較検討して自分の学校で使用する教科書を自由に選択するシステムです。ということは、ある一つの小説（ひろくは国語教材一般）をめぐつてA社が事前に掲載をためらつても、B社があえて掲載して検定をパスするというケースもありえる。この意味では、個々の小説を「載る小説」と「載らない小説」との二つに截然と分類することは不可能ですが、しかしこれをいわばジャンルの問題として対置させてみることは可能でしょう。けつして素朴な実体論としていうものではありません。

戦前（正確には一九四八年度まで）の日本では、「国定教科書」といつて、尋常小学校・高等小学校課程では国家（文部省）が編集作成した、ただ一種類の官制教科書を使用することが義務づけられていました（二時期は中学・師範学校でもこの制度を実施した。明治の近代学制実施の当初からそうだったわけではなく、最初は検定制度でしたが、文部省は一九〇三（明治36）年四月十三日付で小学校令を一部改正して、これ以前の検定教科書制度に代えて国定教科書制度を導入し、翌年四月一日にまず修身・国語・地理・歴史の四科目から施行します。この一九〇四年

は日露戦争開始の年にあたりますが、ただしこの戦争ナショナリズム昂揚の時代思潮と国家主導型の国定教科書の導入とは、そう単純には直結していない。

国定教科書制度の導入について山住正己『日本教育小史―近代・現代』（岩波書店、一九八七）はこう解説しています。

二十世紀初頭における教育界の大問題は、教科書疑獄事件につづく、小学校教科書国定制度の発足である。

検定制の下で起こった問題は二つある。一つは検定教科書の採択をめぐり、出版社と採択委員との間に贈収賄の疑惑がたびたび起こり、それが新聞に報道され、この制度そのものが問題にされ始めたことである。第二は、検定だけでは教科書に教育勸語の趣旨が貫徹されないと見た人たちが現われたことである。この人たちのなかには帝国議会議員もあり、有志議員が貴族院と衆議院で、少なくとも修身教科書は国費を以て編集・刊行すべきであると建議を繰り返していた。

一九〇二年、第一の問題がかつてないほどの規模で起こり、世に教科書疑獄事件といわれる。これをきつかけに、検定制は翌年早々たちまち国定制度に改められた。これは日露戦争をひかえた陸軍当局からの強い要請によつて仕組まれた事件ではないかとの疑惑も持たれている。ときの文相菊池大麓は当時の代表的数学者であり、道府県による教科書統一採択ではなく、学校ごとの採択に改め、教師による教科書論議を盛んにしようとのかつての考えをひるがえ

して、国定化を推進する。

文相は一九〇三年、国定制発足にあつての演説で、教科書をめぐる疑獄は国際的にも醜態だが、多年にわたる弊害を一扫する好機として国定制に改めたのだと述べた。政府にとつての問題は、採択をめぐる醜聞よりも、教育勸語の精神に合致する教科書を、政府の思惑どおりに刊行できないところにあつた。そのことは、修身・国語・地理・歴史の四教科が国体と関係しており、したがつて内容を相互に関連させる必要があるので、これらをまず国定化し、算術・理科などは後まわしにするとの方針にあらわれていた。

ただし、この文章は、第二次世界大戦後の日本の一般的知識人に共通の歴史観に彩色されています。戦後被占領下の日本でGHQ（連合国軍総司令部）が企図した文化占領政策の第一は旧大日本帝国の国粹主義・軍国主義思想の一掃と軍部の徹底批判でした。第二次大戦下にアメリカのルース・ベネディクトが占領統治政策の一環として執筆した地政学的日本文化論『菊と刀―日本文化の型』(The Chrysanthemum and the Sword―Patterns of Japanese Culture, Boston, 1946) は、戦後の日本社会において文化人に圧倒的に愛読されてきた（あるいは、そうさせられてきた）ポピュラーな書物の一冊ですが、ここに書かれていることを、いまわたしなりに敷衍するというと、要するに日本人は体面と対人的な上下関係を偏重する文化の型をもつ人種であり、また戦争（闘争）が大好きな野蛮で危険な人種であつて、この日本人種的な

かのもつとも日本人的な日本人が軍部（軍人）であり、彼らが信奉する国家主義の神髄は「教育勅語」に象徴的に明文化されているということだ。

したがって、「陸軍」や「教育勅語」や「国定制」という用語を組み合わせると、必ずやこのようにいまわしい軍国主義への接近過程として歴史が物語られることになる。歴史の展開過程はそんなに単純なのではない。「教育勅語」が存在しなくても戦争は起きるし、検定制下あるいは非検定制下の教科書であっても国家主義思潮は抬頭する。デモクラシーとフリーダムを標榜する国家であっても、これらを守るためという理由を掲げて平然（傲然）と戦争を開始する。大切なのは、さまざまな国家や社会や教育の制度がどのように利用されていったかという具体的な過程であり関係性なのであって、国定制や教育勅語や軍隊ということ自体が存在悪（あるいは悪の根源）であるかのようには裁断してすむわけではない。

断つておくと、わたしはここで戦前の日本の歴史を弁護しているわけではありません。そうではなくて、戦前の日本の教育勅語や国定教科書の存在自体を悪として批判することは、ひるがえっていえば、それらが存在しない戦後の日本がまるで軍国主義とも戦争とも縁遠い、正しい平和国家であるかのような錯誤をもたらすに危惧するからです。

わたしはただ一種類の情報しか提供しない国定教科書よりも、ただか小さな差違にすぎないにしても複数の情報（あるいはニュアンス）が摂取できる検定教科書のほうがいいと考えて

いますが、この二つはもちろん、いずれも国家の検閲をパスしなければならぬことにおいて同様です。さらにもう一つ視野に入れておきたいことは、国家という抽象的な存在を形成しているのは具体的に個々の人であることです。国家の構成員は、なにも政治家や役人や軍人や教師だけにかぎりません。ごくふつうのわたしたち一人ひとりもまた国家の構成員です。国家の問題は、戦争の場合にかぎらず、平時の市民としての良識や見識や配慮などといった心性にもかかわってきます。したがって、この問題は、わたしたちの向き合う国家という抽象的存在が対象なのではなく、わたしたちとともにある国民・国家の市民一般の心性——あるいは国家という共同体の回路をとおして具現化される個々人の心性——を考察する作業になってくるでしょう。

「ぼくは勉強ができない」教科書に載らない小説

「教科書に載らない小説」の具体的なサンプルとして、二〇〇二年四月に新聞等で報道された山田詠美の小説「ぼくは勉強ができない」をあげることができます。「朝日新聞」同年四月十日付の朝刊紙面は、こう報道しています。

「馬鹿だから」は「差別的」

教科書検定 山田詠美さんの作品

出版社が作品差し替え

来春使われる高校国語の教科書検定で、山田詠美氏の小

説「ぼくは勉強ができない」に意見がつけられ、出版社は別の作品に差し替えた。作品中の「馬鹿だから」というセリフなどが「差別的」と判断された。山田氏は「ばかばかしくて、お話にならない」と話している。

この小説は、勉強よりすてきなことがたくさんあると考える男子高校生の日常を描いた短編集のなかの一編。

転校して間もない主人公が学級委員長選挙で、ある女子生徒に投票すると、教師が「ふざけるな」と怒鳴り出した。なぜ怒るのかよくわからない。主人公は同級生に理由を尋ねる。女子生徒が「馬鹿だから」という。主人公はおかしさを訴えるが、教師に無視され、「この時、初めて、大人を見くたすことを覚えた。」と結ぶ。

出版社は、脚注などをつけることも検討したが、結局、堀田あけみ氏の「1980アイコ 十六歳」に差し替え、合格した。

これが記事の全文です。これによると文科省は掲載を禁じたわけではなく、出版社の側が検定意見を受けて「脚注などをつけることも検討したが、結局」（自主的に）作品を「差し替え」というのです。これはいったいどういうことなのか。

山田詠美の小説を採録したのは——新聞では明記されていますが——「旺文社」という出版社の「国語総合」という教科書です。『ぼくは勉強ができない』（新潮社、一九九三・三）という長篇小説のどの部分が掲載予定だったかは明記されていませんが、新聞記事にある要約文によって、この小説の冒頭部分（初

刊本でいうと10頁まで）が教科書採録本文だったことがわかります。以下、あえて当該部分を引用しておきます（ただし採録本文は最初の二（形式）段落が省略されていたかもしれせん）。

*

クラス委員長は、ぼくと三票の差で、脇山茂に決まった。彼は、前に出て挨拶をするために立ち上がった瞬間、振り返り、ぼくの顔を誇らしげにちらりと見た。相変わらず仕様のない奴だなあと、ぼくは思う。彼は、ぼくが忌々しくてたまらないのだ。

「えー、皆さんに選出されて、委員長を務めることになった脇山です。まだ慣れないクラスの皆さんが、ぼくを選んでくれたことは、大変光栄で……」

光栄も何も。ぼくは頬杖をつきながら、ぼんやりと彼の挨拶を聞いていた。皆、彼の名前が、試験の成績発表で常に一位の場所に載っているから、書いただけだ。クラス委員長が誰になるかと知ったことではないのだ。それなのに、彼は、頬を紅潮させて、喋りまくっている。委員長をやると、進学に有利なのだろうか。あれ？ 大学受験に内申書なんてあったつけ。

クラス委員長を決める時期になると、ぼくは、小学校五年生の時のホームルームを思い出す。その時も、やはり、投票で委員長を決めることになっていたが、転校して来たばかりで、あまり事情の解っていないかったぼくは、教壇の前の席のおっとりした様子の女の子の名前を書いた。なん

だかやさしそうに見えたからだ。そのことが、まるで重大事件のように扱われるとは予想もしていなかったのだ。

開票が進み、その女の子の名前が呼ばれた時、黒板に向かって、正の字を書いていた生徒は信じられないという様子で後ろを振り返った。クラス全員の子たちが、くすくすと笑い始めた。ぼくは、何がどうなっているのやら、さっぱり解らず、あたりをきよるきよる見渡した。その瞬間、担任の教師は立ち上がり、大声で怒鳴った。

「誰だ！ 伊藤友子の名前を書いた奴は!？」

皆、くすくす笑うばかりだった。ぼくは、すっかり仰天してしまったのと、腕力の強そうな男の教師に怯えたのと、返事をする機会を失ってしまった。

「誰だか手を上げろと言ってるんだ！ ふざけるにも程があるぞ!!」

ふざける？ ぼくは、混乱して、その言葉を頭の中で反芻した。伊藤友子の名前を書くことは、ふざけたことなのか？ クラス全員が委員長になり得る、そういうことから、投票で決めることになっていたのではなかったのだろうか。

教師が怒鳴っている間、伊藤友子は、ずっと下を向いたきりだった。肩が震えているように見えた。ぼくは、小声で隣の席に座っている男子生徒に尋ねた。

「ねえ、どうして、伊藤さんの名前を書いちゃ駄目なんだい」

彼は、迷惑そうに答えた。

「馬鹿だから」

その瞬間、教師は、ぼくたちに目を止めて、再び怒鳴った。

「そこ!! 何、喋ってる。もつと真面目にならんか!」

隣の生徒は、ぼくに向かって舌打ちをした。ぼくは、肩をすくめていた。教師は腹立たしげに音を立てながら、教室じゅうを歩き回った。

「先生は悲しいよ。皆に行動力をつけさせ、自立心を養うために、クラス委員長を選挙で決めてるというのに。それをふざげた態度で、馬鹿にすると。投票はやり直した。

二度目は、自分の名前も横に書くこと。委員長、副委員長、書記、その横に、自分の名前を書いて、記入すること。解ったね」

「解りません」

教師の足が、ぼくの言葉で止まった。ぼくは、小さく呟いただけのつもりだったが、その反対を主張する言葉は予想外に響いてしまったようだ。教師は額に筋を浮き立たせて、振り返った。

「誰だ!! 今、解りませんと言った奴は!! 立て!」

仕様がなくぼくは立ち上がった。クラスじゅうが、ざわめいた。

「時田か。転校して来たばかりで、この学校のことを何ひとつとして解つたらんくせに。で、どうして、解りませんと答えた？ それを説明してみなさい」

「だって、伊藤さんの名前を書いたのは、ぼくだからです」

一斉に驚きの声が上がった。信じらんない。そういう叫びにも似た声が、ぼくの耳に突き刺さった。

「……おまえだったのか。しかし、何故だ。転校して来たばかりとはいえ、誰を選んで良いのか、おまえにも区別はつくだろう。それとも、茶化してみたかったのか」

「そうではありません」

「じゃ、まだ友達が出来なくて、事情が飲み込めてなかったんだな」

「そういうんでもないんです」

「じゃ、何なんだ」

「伊藤さんが、クラス委員でも良いと思ったからです」

「なにい!？」

再び、笑いの渦が起こった。

「きさま、このクラスをなめているのか」

「なめてません。先生、どうして、伊藤さんでは駄目なんですか?」

教師は言葉に詰まって唇を歪めた。

「……じゃ、お前は、何故、伊藤が相応しいと思ったんだ」

「親切そうだからです」

誰もが笑い転げた。中には、机を叩いているものもいた。ぼくは、無然としたまま、教師をにらみつけていた。訳のわからない怒りが、ぼくの心に急速に湧いて来たのだった。「まあ、いい。時田は、転校生で何も解らんだ。皆、投

票をやり直す必要はない。どうせ一票ぐらい無効があつたつて、結果に変わらないのだ。丸山、残りのやつを開票しなさい。時田は座つてよろしい。今後、注意するように」
そうは行かなかつた。ぼくは、伊達に、十一年間生きて来たのではないのだ。ここで引き下がるのは恥だ。ぼくの母は、いつも、格好の良い男になるのよ、と、ぼくを諭してくれたのだ。

「先生は、ぼくの質問に答えていません」

「何?」

「どうして伊藤さんでは駄目のですか」

「……………」

「勉強が出来ないからですか?」

教師は答えなかつた。ぼくを完全に無視したまま、丸山という前回の委員長に、残りの票を読み上げるよう促した。伊藤友子の名は、もう呼ばれることはなかつた。ぼくは、仕方なく腰を降ろしたが、気持は暗かつた。前に目をやると、机に伏せて鼻を吸っている伊藤友子の姿が見えた。ぼくは、この時、初めて、大人を見くだすことを覚えた。

*

以上です。じつにインパクトのある文章だと思えます。こういう文章を読むと、やはり文学テクスト(広義には芸術ジャンル全般)にはどこかしら〈毒〉があるのだと思います。〈毒〉はしかし〈薬〉になる。いや、〈薬〉は〈毒〉からしか出来ない。

この小説(以下、この場面だけをさして「この小説」と便宜的によぶ

ことにします)に対する文部科学省の検定意見には、「生徒が理解しやすいよう、工夫が必要だ」(「朝日新聞」記事)という一節がありました。(「毒」を「薬」として生かすためにもっと「工夫が必要だ」というのであれば、まずは正論だといってかもしれません。ただし、この検定意見では、どんなことを「生徒が理解」するために、具体的にどんな「工夫が必要だ」といつているのか、まったくわかりません。いや、遠回しな言い方はやめましょう。要するに、文部科学省の検定意見は、この小説の本文中にある「馬鹿だから」という表現が気に入らないのです。つまり、「馬鹿」よばわりは「差別」だから、この「差別」を助長しないように教科書の脚注や設問等で「工夫」して、それはよくないことだと生徒がちゃんと「理解」するように教育的な配慮(処置)をほどこしなさいというのです。

新聞記事によると「出版社は、脚注などをつけることも検討した」といいますが、「脚注」をつけるといつても、ではどんな脚注をつけるのでしょうか。「馬鹿」は差別表現だから悪い言い方であり、よい子のみなさんは使わないようにしましょう、とでも書くのでしょうか。それとも、この「女の子」はほんとうは「馬鹿」ではないのに「隣の席に座っている男子生徒」が誤解してそう言ったにすぎないのだと弁明してあげるのでしょうか。まったく馬鹿馬鹿しいことです。「馬鹿」という表現がよろしくないことなど小学校入学以前の子どもでも知っています。ちゃんと知っていて、それでもなお「馬鹿」と口にするのです。泥棒は悪いことだと知っていても泥棒をするのと同じこ

とです。

教科書に採録する文章は作者に無断で書き直すことはできませんが、作者の了解があれば原文とは異なる表現に改訂することも可能であり、また部分的に削除(省略)することもできます。出版社の編集部はこれらの対処方法も検討したでしょうが、結果的に、これをしなかつた。そして、もっとも屈辱的な選択肢、すなわち作品の差し替えをやつた。編集部でどんな議論があつたかはわかりませんが、わたしはこの屈辱的な撤退を高く評価します。なぜならこの小説の場面はこの表現を抜きに文学テクニクにならないと思うからです。

ちなみに言い添えておけば、「馬鹿だから」という表現自体は「差別」ではありません。これは「区別」です。「差別」と「区別」との区別(＝定義)は明確ではないので、しばしば混用されていますが、「差別」とは個人を一個の個人として対象とせず、その人の属性、たとえば人種とか民族とか地域とか性別などを根拠にしてマイナス(あるいはプラス)の価値を付与する言動をさします。「あの人は○○の出身だから」とか、「女性(あるいは男性)だから」とか、「ハゲ頭だから」といつて「○○だ」と決めつけることです。「区別」はこれとは違います。「おまえは頭が悪い」というのは区別であつて差別ではありません。「おまえ」とはある特定の個人をさしていますから。この「おまえ」が「○○人」となると、これは差別です。もちろん、そういう区別がいいか悪いかは、また別の問題です。「区別」の問題を「差別」の問題にすりかえて問答無用に表現を封殺する

のはよろしくない。

この小説の場面では、クラスの教師と生徒たちが暗黙の了解事項として共有しているクラス委員長の選出基準を主人公の「ぼく」（時田秀美）から問い返されているのに、このことに誰もがまったく気づかない。これがなんとも奇妙な光景であることは、この小説の読者ならば誰でも感じることです。文部科学省が「工夫」の必要など心配しなくても、教室でこの小説を読んだ生徒たちはみんな、「馬鹿だから」という言い方はよろしくないと感じ、そしてさらにクラス委員長の選考基準も、ふりかえってみるとずいぶんおかしいことだったと気づきます。そういうふうはこの小説の語りは展開されています。

この小説はしかし、クラス委員長の選考基準を問い直すメッセージがテーマなのではありません。クラス委員長などは要するに成績がよくて先生のお気に入りの生徒を選べばクラスがうまくいくと誰もがとうに学習していることです。クラスの絶対権力者が教師である以上、権力者という関係にある要領のいい（＝「馬鹿」ではない）生徒を代表者にしておけば先生も満足するしクラス運営もうまくいく。この程度の人生の常識（＝日々の生活の知恵）をわざわざ高校生に向かつて問い返しても、それはほとんど問い返すに値しない問題ではありません。子どもたち、まして高校生は、もつと大人です。

この小説の場面で核心をなしているのは末尾の一文のすぐ前にある、「前に目をやると、机に伏せて鼻を吸っている伊藤友子の姿が見えた」という一文です。彼女の心が深く傷ついている

るのは、教師や大半の生徒たちの侮蔑的な反応によるものではありません。そんな仕打ちには、おそらくは彼女はふだんからさまざまなかたちで受けてきたに違いないことです。そうではなく、彼女は自分の存在がこうしてクラス全体の険悪な騒動の中心に置かれて、いわゆる「さし者」になってしまっていることに、どうしようもなくつらい思いをしているのです。彼女は深く傷ついている。この意味からすると、彼女の味方であるはずの時田秀美も、じつは彼女にとっては主犯格の加害者にほかならない。彼が自分の名前さえ書かなかつたら、自分はこんなつらい思いをせずにすんだのですから。彼女はけつして「ぼく」に感謝もしなければ親近感も抱いていない。彼の行為は、余計なお世話、ありがた迷惑です。

このことは「ぼく」にも伝わっています。彼はその程度の感受性は身につけています。この小説では、この「机に伏せて鼻を吸っている伊藤友子の姿が見えた」という一文のあとに、「ぼくは、この時、初めて、大人を見くだすことを覚えた」という一文が接続します。「ぼく」はまだ「小学校五年生」ですから、この事態をうまく自分自身の問題として処理することができず、「大人」に責任転嫁したのかもしれない。けれども、彼はこの伊藤知子のうしろ姿を目にした瞬間、自分のとつた行動が一人の「女の子」を徹底的に傷つけてしまったことを思い知ったはずなのです。

この小説の登場人物たちは誰一人として悪意をもっていない。先生もクラスの生徒の大半も要するに常識の枠内で思考し

行動したにすぎない。一方、「ぼく」も、もう一つの常識に従ったにすぎない。一人の「女の子」の存在をプラスに評価しようがマイナスに評価しようが、それはどちらでもいい。そうではなく、そんな評価の存在それ自体がかくも根深い（痛み）をえぐり出してしまふ。この（痛み）は、どうにもケア（治癒・手当）しようがない性質のものです。うつむく彼女に向かって、いったい誰がどんな癒しのことばをかけてあげられるのでしょうか。どんなことばもどんな態度も、この彼女の痛みをやわらげることができません。

これは、この小説の（毒）です。不意に訪れてくる、人間存在の、互いに避けようのない裂け目の一つの創出です。もし文部科学省の検定意見が、この一人の「女の子」の痛みに対してケア（治癒）しろといつているのなら、これは不毛な意見というほかない。この小説の核心は、この「女の子」のどうにも癒しようのない孤影を描いてみせるところにあるからです。人生には、まったく悪意でなく、このように徹底的に深く人を傷つけてしまう局面があります。どんな手当もここでは無効です。この彼女の傷心の姿なしに、この小説は成立しない。どんなケアも彼女の（痛み）に対しては不可能であることを、わたしはたまた歯噛みする思いでじつと耐えるしかないのです。（毒）を抜いてはいけません。

この意味で、この教科書の編集部がこの小説をやむなく撤収して、別の作品と取り替えた屈辱の選択は、まことに正しかった。この小説は、設問や脚注で「差別」を巧みに「手当」（糊

塗）したりしては骨抜きになってしまふ。（毒）のある小説を毒消して読ませるのは最低の行為です。そんなをするくらいなら、いつそ読ませないほうがいい。

それにしても、文部科学省の「検定」（検閲）行為という、いわば抽象的な権力システムの存在あるいは機能を批判するのは容易ですが、教科書検定作業は、じつさいは文部科学省の担当吏員（教科書調査官）だけが担当するものではありません。文部科学省から依頼された全国各地の高校教員や大学研究者らの複数の意見が集約されて公式に「意見」としてまとめられる。この意味で、この小説に「ノー」という意見を寄せたのが、わたしたちのすぐ隣の誰かであるかと想像すると、いささかつらいものがあります。高校生のリテラシーをみくびっているのか、現場の国語教師の読解指導能力を信頼していないのか、どちらかなのでしょうか。

「羅生門」―教科書に載る小説

「教科書に載る小説」の代表例は、やはり芥川龍之介の「羅生門」といつていい。この小説は現在、ほとんどの高校国語教科書に採録されています。この小説が教科書に採られる理由はいくつも考えられますが、じつは生徒たちの評判はあまりよろしくない。にもかかわらず、この小説が教師に歓迎される理由の一つは、これがいわゆる（種明かし）小説だからです。つまり教師が小説の本文に沿って一字一句種明かしをするように生

徒に教えていくことができる。これは教師にとつて、じつに気が持がいい。「教壇」という一段高い場所に立つて特権的に本文を解説してみせることができる。なにしろ教師はあらかじめこの小説の結末を知っているのので、まことに優越的に生徒を誘導していくことができる。

「ご存じのとおり、「羅生門」の末尾は、「下人の行方は、誰も知らない」という一文で閉じられています。誰も知らない——この小説の語り手も含めて——というのですから、教科書ではしばしば、ではこのあと下人はどうなつたでしょう、と生徒に問いかける設問があつたりします。すると生徒の一人が（必ず）こう答えるのです、——下人はお婆さんの着物を奪つたことを後悔して羅生門の楼上へ駆け戻り、お婆さんの手をとつて、お婆さんゴメンなさい、これからは二人で仲良く力をあわせてこの困難な世の中を生きていきましょう、一人なら困難でも二人の力をあわせれば道は開ける。……きつといるんです、こんな子。いい子です、とつても可愛い、つぶらな瞳の中に星をキラキラさせて、小さな胸をキュンと痛めて。すると教師もこう答えるのです、そうかもしれないね、下人がそのことに気づいてくれるといいね、と。いや、これは教室だけの出来事ではありません。日本近代文学の研究者の中にもそれらしいことを論じている人がいます。

そうでしょうか。そんな読みを可能にする要素がこの小説には書き込まれているでしょうか。たしかに「誰も知らない」というフレーズはあります。しかしこのフレーズは小説全体のコ

ンテクストのなかに置かれている。だから表層的な意味としては知らないといつても、全体のコンテクストのなかに置くと、知っているという意味に変容してくるかもしれない。あるいは、もつと違う意味合いを帯びてくることもありえる。ことはばじつさいにはコンテクストを離れては存在しない。たつた一つの単語でも文でも、それがじつさいに用いられる際は必ずコンテクストのなかに置かれている。ましてや「羅生門」の末尾の一文の場合は、この小説の書き出しの一文から数えていつたいいくつの単語と文の連なりを引き受けてここに至っているか。このことを抜きにして、この表現の意味をさぐることはできません。

*

「羅生門」の物語内容を、以下のように再確認しておきたいと思ひます。

(A) 京都の町は荒廃している。物質的に荒廃しているだけでなく、精神的にも荒廃している。「仏像や仏具を打ち砕いて」というのは、いわゆるモラルが徹底的に崩壊していることを示している。当時は宗教（仏教）の時代です。一方、現代社会は科学の時代です。世界の構造や変化を科学で理解し認識します。宗教の時代にあつては、この科学が宗教に置き換えられるわけですから、たとえば火山が噴火する原因は山の神様が怒っているからであり、病気になるのは仏様に祈つて治してもらふ。この宗教の時代にあつて「仏像や仏具を打ち砕く」行為がいかにアナキーであるか。いわゆるモラルなどな

いのです。モラルは、ことばの産物です。

(B) 羅生門の下に一人の下人がいます。羅生門という場所はこの小説の構造上において重要です。「羅生門」という作品を時間論的に構造分析すると、「暮方」にはじまり、「黒洞々たる夜」に終わっている。昼を〈善〉の世界、夜を〈悪〉の世界と定義してみると、暮方は両者のはざまの時間帯であり、やがて夜Ⅱ〈悪〉Ⅱ下人が盗人(悪人)になることが約束されている。ここから「羅生門」の小説世界は語りはじめられている。一方、空間論的な構造からいうと、羅生門という大きな門は京都の町のまんなかを南北にはしる道路の正面出入口に位置している。この場所に下人がいる。彼は主人の家を「四五日前に暇を出され」ている。そして四、五日後の現在、羅生門の下にたたずんでいる。この四、五日の間に彼が具体的にどう過ごしたかはわからない。しかし、わからなくていいのです。なぜなら、このあと彼の思考は「ある局所に逢着し」ます。すなわち、彼が手段を「選ばない」という決断に至るのは、手段なんかを選んでいると飢え死にするしかない現実をこの四、五日間に思い知らされたからにはかならない。そして、彼は最後の場面で盗人(強盗)になって京都の町に戻っていく。いわゆる往還運動をする。この往還運動の折り返し点に、老婆がいる。この老婆は、地上よりも高い場所において、光の中から立ち現われて、下人に新しい〈生〉を啓示する。いわば老婆は〈神〉という存在と同じ役割を果たしている。

(C) 人間の常識(モラル)というのは、長い歳月の日々の生活習慣に根ざしていますから根深いものです。下人も容易にはこのモラルの外側に出ることはできない。そこで彼は、いろいろな通過儀礼を経なければならぬ。老婆との出会いもその一つです。「羅生門」の一般的な読解では、下人は老婆の発言に示唆されて盗人になったという読みが少なくないようですが、老婆の口にする〈生きるために仕方なく犯す悪は許される〉という程度の認識ならば、下人はすでに冒頭の羅生門の下にいます。所有してはいたはずですが、だから彼はすでに羅生門の下にいます。手段は選ばないことを決断している。だから、下人が盗人になる過程を解く鍵は、「その時のこの男の心もちから云へば、餓死などと云ふ事は、殆、考へる事さえ出来ない程、意識の外に追ひ出されてゐた」という一文にあります。この一文が告げているのは、これ以前の下人が二者択一的な人間的〈生〉のパラダイムの内に生きているのに対して、これ以後の下人が、生命体(身体)の二元的充足を原理とする動物的〈生〉を生きる存在へと変容したことを示しています。下人はいわば老婆の自己弁明のことばに自分自身の姿を見たのです。自分の姿を見たというのは、下人が自分という存在の外側に立ったということです。あるいは、ことばの外側に立ったといっている。

(D) 考えてみれば老婆こそは動物的な存在として描かれていたはずですが。彼女はいわば昼間の鴉の化身です。この鴉は肉食鳥です。肉食鳥としての鴉は手段を選ぶとか選ばないとかに

迷つたりしない。そもそもモラルがない（＝ことばがない）のですから。老婆とて本質的には同様です。彼女はただ下人に強いられて、とっさに後づけの自己弁明をしたにすぎません。かくて京都の町は、喰うか喰われるかの動物たちの生がうごめく世界（＝黒洞々たる夜）に墜ちていく。ちなみに、「貧困」が「社会問題」として認識されるのは近代になってからだ。とハンナ・アレントは『革命について』のなかで述べています。近代以前は、貧困は個人にとつては宿命であり不運であり、したがってあきらめるより仕方ない事象だった。貧困が「生存権」を侵害する不当な状況だと主張されはじめたのは、ヨーロッパではフランス革命以降、日本では明治になってからのことです。やがてカール・マルクスが登場し、貧困は政治的・社会的構造のひずみであることを理論化した。いわば貧困を政治問題・社会問題として翻訳したのです。平安朝の下人には、もちろんこの認識はありません。だから彼はこの小説において自分が置かれた苦しい状況を社会政策の不備として告発したりしませんが、今日の読者である近代人のわたしたちが彼の生き抜く意思を支持せざるをえないのは、あらゆる人間に生存権があることを認めているからです。

*

このようなかたちで小説「羅生門」の内容を辿り直してみると、下人の変身（変容）は、およそ自分の悪行を後悔した下人が後戻りしてお婆さんに謝るといったいのものではないことがわかります。自分が生き延びるためには、ぎりぎりのところ

で他人を犠牲にし、蹴落としても、わたしたちは生きる。生き抜く。まことに救いがない。（共生）などおよそ不可能なのだと告げている。これはこの小説の「毒」にほかならない。

にもかかわらず、わたしたちはなお、これを認めたがらない。だから、下人は後戻ってお婆さんに謝って、などという（毒消し）をやらかす。あるいはまた、エゴイズムを超える事例をさがして、幼い子をかばって覆い被さるようになんでいく母の無償の愛とか、あるいは宗教上の献身（＝殉教）とかを持ち出す。無償とか献身とかはいかにも事実でありましようが、しかし、これら以外の事実もやはり事実なのです。人間という存在は瞬間的には超人的な献身や無私の愛を体現したりするのでしようが、一方、持続的な責めにはどうやら弱い。日本の江戸時代の隠れキリシタンは、磔はりつけとか火炙りとか、まことにむごたらしい責めを受けても断固として転向しなかつた。ところが、一日の食事の量を減らされると、てもなく転向したというのです。わたしはこれを新村出しんむらたけや坂口安吾の文章で知つたにすぎませんが、なるほどそうかと思わせられます。思えば「羅生門」も、この（飢え）という回路をとおして、救いのないエゴイズムを問うた小説でした。なにしろ人間は（ものを食う動物）です。小説家の辺見庸へみみょうの著書によると、動物の身体は、筒状の胴体の一番前に口があり、一番うしろにお尻がある。すなわち、喰つて↓出す、そんな筒状の物体が動物なんだというのです。けだし名言です。芥川龍之介が見つめたのは、ただ絶望するしかないエゴイズムです。他人を蹴倒してでも自分が生きる。この人

間の動物性です。

このエゴイズムはしかし、とても愉快な要素でもありません。なにしろ自分（*ego*）を中心に生きるというのですから。自分が世界の中心にいて、わがままほうだいにふるまえるというのは気持ちがいい。この単純な事実はずでに歴史上の権力者たちが無数に証明してくれています。

宮澤賢治は「世界ぜんたいが幸福にならないうちは個人の幸福もありえない」（『農民芸術概論綱要』）と述べています。自分だけよければ他人のことなどかまわないという狭量なエゴイズムを戒め、無私の精神でもって世界全体の幸福を願うという意味では、なるほど美しい祈りのことばには違いない。自分だけたらふく食っているそばで飢え死にしていくなら、やはりいい気持はしない。自分は幸福だとは思わない。しかし、あえて原理的にいうと、これは間違っています。幸福（感）とは不幸ではないという意識の別名ですから、この世界から不幸という意識がなくなると、幸福という意識もなくなってしまう。他人の不幸は蜜の味がすると言います。わたしたちは無意識のうち他人の不幸をさがしては自分の幸福をかみしめている。これはもう絶望的に救いのないことです。この救いのなきは、さきの山田詠美が「ぼくは勉強ができない」で描いてみせた教室の光景と同じくらいに絶望的です。仕方がないので。事実ですから。この事実から目をそむけるわけにはいかない。今日の世界の食糧問題を考えても、地球上の全食糧をもつてしても全地球人口は支えきれない（あるいは支えきれないに等しい）状況

にあります。（共生）という理念が、生きとし生けるものが（共に生きる）という理念の表明である以上、わたしたちの（共生）を願う心は、このきびしい現状認識と無縁であることはできない。芥川龍之介は（共生）という用語で考えたわけではありませんが（当時は「共生」という用語はなかった、彼が「羅生門」という小説で心理実験しようとしたのは、このことであつたといつていい。この絶望からはじめるしかないのです）。

最近の日本の小説を読むと、いわゆる癒し型の小説が氾濫しています。小説の最後のほうで主人公が、ああ癒されていくなあ、なんてつぶやいている。余計なお世話だと思えます。人間には自己治癒力があります。人間の身体は傷つくと一生懸命に治ろうとする。同様に、人間の心も傷つくと必死に治ろうとします。傷が深すぎると医者の手助けをかりないと治らないように、心の傷もときには専門家の手助けをかりないと治りにくいことがある。けれども、おせっかいが過ぎると、自己治癒能力は衰えてしまう。

学校教育の場、あるいは文部科学省の検定という場合は、この個々人の生徒の自己治癒能力をてんから信じていないんだと思えます。「ぼくは勉強ができない」という小説は、人は悪意でなくとも人を傷つけることがある、しかもその傷ついた痛みは誰も癒すことができない真実（『事実』）を描いた小説です。「羅生門」も同様です。人は他人を蹴落としても生き抜こうとする。必ずそうするというわけではない。にもかかわらず、そうすることがある。これは事実です。この事実（『毒』）を前にして、

どうして毒消しに懸命になるのでしょうか。下人が「お婆さん、ごめんね」などと口ばしると想像するのは、他愛もないセンチメンタルなごまかしです。毒はきちんと毒の味をかみしめたい。もっと高校生を信じたい。彼ら／彼女らは、きつと大丈夫です、ちゃんと自己治癒能力をもっています。あるいはそれが足りない心配するなら、すこし励まし、鍛えてやるだけがいい。けつして〈毒〉をかくしたり、あわてて消したりしないほうがいい。かつて柴田翔という作家が「されど、われらが日々」というタイトルの小説を書きました。絶望し、立ちすくみ、立ちきわまり、それでもなお、〈されど〉と折り返して前へ歩み出そうとする。ここに〈祈り〉が誕生する。念願といいかえてもいい。宮沢賢治のことばも、この折り返しの祈りにほかならない。もう一度くり返しておきます。〈毒〉は〈薬〉になる。いや、〈毒〉しか〈薬〉にならない。

何かについて考える、というのは、その外側に立つことです。外側に立った人間は、内側にいる人間にとっては、まがまがしい存在です。この意味では、考えること自体が〈毒〉をもたらす行為です。それでもなお、〈毒〉しか〈薬〉にならない。とすれば自分の〈毒〉で自分の〈薬〉をつくるしかない。これが文学の効用であり、「国語」という科目の大きな目的の一つだと思われまます。（――国語教材研究のために――）

本近代文学」第二号（二〇〇三年）に寄稿（翻訳＝李在錫^{イ・センソク}氏）したものを、さらに若干改稿したものである。なおまた、本稿の一部は既発表の小文「脇役たちの日本近代文学史―伊藤友子」（『絃説』Ⅱ・05、二〇〇三・一）と重複している。

（九州大学大学院比較社会文化研究院教授）

〔付記〕本稿は長崎県高等学校教育研究会国語部会平成14年度研究大会の講演用原稿として準備し、翌年、若干改稿して韓国日本近代文学会機関誌「日